

「なまくら」

作・坂本鈴

【登場人物】

- 小松香 ……29歳。会社員。
谷口 ……31歳。香の会社の先輩。
中村 ……29歳。香の恋人。
山野 ……29歳。香の会社の同僚。
ちえ ……24歳。香の会社の後輩。
由美 ……29歳。香の大学時代の同期。
栗原 ……香の大学時代の同期。

舞台には、女物の服、靴、化粧品など女の使う生活用品が散乱している。
目覚まし時計のアラームが鳴り、パジャマ姿の香があらわれてそれを止める。

開演。

香

じゃあ、そろそろはじめていこうかとおもいます。
えっと、これからやるのは、まあ、私の話なんですけど。でもまあ、なんか、おこるわけでもないっていうか、特に何にも起こらないと思うんですけど、まあ今までそうだったんで、二九年。

あ、いやまあ、小さいことはね、なんか、ありましたけど、個人的な、なんか、こう、色々は。でも別に誰かから見て、「大冒険!」とか、「大事件!」とかは、まあ、なかったんで、だからまあ多分だいたい、そんな感じでいっちゃうとおもうんですけど。はい。

あ、いや、でも私、別に誰かに怒られる様な生き方はしてないですよ。だって、ねえ、真面目に、ほんと真面目に進学して、だって小学校から、中学校、高校、大学、全部で、六、七、八、九…十、十一、十二…十三、十四、十五、十六、十六年間。で、ちゃんと、就職もして、もう、五、六?年?ねえ?

香、パジャマから会社の制服に着替えながら。

香 …まあ別に、好きな仕事とかじゃないですけど、なんかいまどき、結構、「女子は雑用」的な、コピーとか、お茶くみとか、ほんと、え、いまどき？って感じの仕事ですけど、でも仕事は仕事だし、ちゃんとやってるし、文句あるか、みたいな。
みたいな感じなんですけど、でも、じゃあ、自分がだから満足してるかっていうと、微妙で、変わりたいたとか、なんか、思わないわけじゃないんですけど、でも、ねえ、もう今さら、あれじゃないですか。色々思っても、目覚まし鳴ったら起きなくちゃだし、起きたら準備しなくちゃだし、準備して、電車乗って、会社いったら、はじまっちゃうし。

ちえがあらわれる。

ちえ おはようございます。
香 え、ああ、おはよう。

そこは会社のロッカー。ちえ、着替えはじめる。

ちえ いま何分ですか。
香 えっと、五十二分。…五十二分？やばい。
ちえ いや、私のほうがやばいっす。
香 うわ、ねえ
ちえ え
香 すっごいお酒臭いんだけど。
ちえ まじすか。ブレスケア超たべたのに。
香 今日お茶だしとか禁止ね。
ちえ すいません。
香 いつまで飲んだの。
ちえ 朝まで。
香 わかいねー。
ちえ いや、もう無理ですわねー。しんどいですわねー。
香 まあ次の日仕事あるときはさ、すこし考えてね。
ちえ はい。すいません。
香 じゃあお茶わたしが出しとくから。着替えたら企画書のコピーとクリップ止め
ちえ はい。えっと、部数は
香 スタッフノートにかいてあるから。

ちえ わかりました。

香 あ、あと。

ちえ え。

香 いったでしょ。井上さんに。

ちえ え。ああ。小説ですか。

香 そう、それ。

ちえ だめでした？

香 やめてよ。いいふらすの。

ちえ 別にいいふらしてないですよ。

香 もう。

ちえ でもすごいですよね。お話かくとか。

香 すごくないよ。

ちえ いまどんなのかいてるんですか。

香 いま。

ちえ はい。

香 まあ。いまは。弁護士目指してるサラリーマンの話かな。

ちえ それって、あれですか。グッチーさんですか。

香 え、いや、ちがうちがう。ちがうよ。

ちえ えー。

香 いや、まあ、モデルはまあ、ちょっとはいつてるけど。

ちえ えー、先輩ってそうなんですか。グッチーサン狙いですか。

香 だから、ねらってないって。

そこはオフィス。香、お茶をもっていく。

谷口の前に出ると、すこしどきどきして。

香 あ、あの、お茶。

谷口 あ、ありがとう。あ、そうだ。これ、おみやげ。

香 え。

谷口 みんなで。

香 あ、はい。あの、出張、おつかれさまでした。

谷口 ああ、うん。…あ、はい、（誰かに呼ばれたようだ）じゃあ。

谷口、去る。

香、身もだえする。きがつけばちえがいる。

香 いや、でもだからそういうんじゃないんだって。

コピーをとっている。作業をしながら。

ちえ じゃあどういうのなんですか。

香 いや、なんか、ご利益ありそう、みたいな。

ちえ ご利益って

香 だってすごいじゃん。いまから弁護士目指すとかさあ。すごくない。

ちえ すごいですよ。仕事もできるし。

香 ね。

ちえ ですよ。

香 いや、でもだからなんていうの、彼女になりたいというよりは、谷口くんになりたい、みたいな。

ちえ へえ。じゃああれなんですか。べつに付き合いたいとかじゃないんですね。

香 だってまあ、彼氏いるし。

ちえ あー……、関係なくないですか？

香 関係あるでしょ。

ちえ そうですか？

香 そうだよ。一応結婚も考えてるし。

ちえ え。うそ、結婚するんですか。

香 まあ、ながいし。

ちえ どれくらいでしたっけ。

香 八年？

ちえ なが！

香 学生のおかげだからからねー。

ちえ 寿退社ですか。

香 しないしない。

ちえ え、なんで。

香 そんな甲斐性ないもん。お給料おなじくらいだし。共働きだよ。

ちえ そうなんですかー。

香 で、そっちはどうだったの。

ちえ え

香 合コン。

ちえ あー。

香 朝までつてことは盛り上がったんでしょ。

ちえ 逆ですよ。

香 え。

ちえ もりさがっちゃって、一次会で解散して、女同士でオールです。

香 それはなんか

ちえ 結局あれですよ。いい男はもうほとんど市場にはのこってないってことですよ。ね。

香 っていいながら女同士でオールしたわけね。

ちえ そういうことです。

山野が登場。

山野 おわりました？

ちえ あ、いま半分です。

山野 あ、じゃあ十五部はありますか？

ちえ 全然。二十は。すぐいきますか。

山野 あー、そーすね、なんか、とりあえず宣伝部のほうに十五ほしいらしいんだけど。じゃあ今もっていきます。

ちえ、企画書を持って去る。

山野 かけてます？

香 いやあ、まあ。そっちは。

山野 昨日脱稿しました。

香 まじですか。

山野 まじです。

香 よかったですねー。

山野 なんかがあれですよ。年に何回かしか言えない台詞ですよ。 「脱稿しました。」俺、今日十回くらい言いたいです。脱稿しました。

香 おめでとうございます。

山野 ありがとうございます。で、そっちは、どうすか。いま。

香 いやー、

山野 出せそうですか。

香 いやー、

山野 進みがあれですか。

香 いや、すすみてきには、そんな、あれなんですけど。

山野 あ、じゃあ、

香 ああ、でも、やっぱりちよっと、みなさんにお見せできるほどでは。

山野 大丈夫ですよ。メンバーも小松さんの作品、面白かったって言ってましたよ。

香 あれはまあ、だいぶまえに、ねえ、時間かけてつくったあれだったんで。

山野 大丈夫ですって。次の合評会は僕も出しますから。一緒に出しましょうよ。
でも。

山野 来月は同人の選考会もありますし。よければそれも

香 いや、それはとても。

山野 いやいや、ていうか、僕てきには、もう、メンバーになっちゃえよ、みたいなかんじなんですけどね。

香 えー。

山野 どうですかね。

香 いや、ほんと、わたしは全然趣味なんで。締め切りとか追われるのもちよつとやだなーっていうか。

山野 そうですか？

香 はい。仕事も中途半端になっちゃいそうだし。プライベートも、
山野 プライベート。

香 いや、別に、家事とかですけど。ご飯つくったり、お掃除したり、とか、ちゃんとしてたいっていうか、

山野 去る。

そこに中村。中村と香の部屋。

中村 ただいまー。

香 おかえりー。

中村 お、いいにおい。

香 エビフライ。

中村 いいねー。

香 いいでしょ。台拭いて。

中村 おう。ああ、そうだ。あのさー、栗原、下の子生まれたらしいよ。

香 まじ。

中村 うん。今度柴本とかと見に行くけど、どうする？

香 いく。

中村 じゃあ、土日ってかんじだよな。

香 うん。

中村 柴本と調節してみるわ。

香 うん。

中村 なんかあれだよな。2児の父親ってなあ？

香 ねえ。

中村 あれだよなあ。

香 あれだよねえ。

中村 みんなどうしてんだろうな。他の奴らとか。

香 あ、いったつけ、あたし来週由美に会うよ。

中村 え。なに、あいつ帰ってきてんの。

香 そうみたい。

中村 へえ、今なにしてんの。

香 エステティシャンはやめたっていったような。

中村 健康食品販売じゃなかった。

香 それはそのまえ。

中村 そうだっけ。

香 なんか、続かないみたい。

中村 へえ。でもあいつもすごかったよなあ。

香 そうだね。

中村 なんだっけ。えびまよの女。

香 そうそう。部屋までいってえびマヨネーズ炒めまでつくるのに、据え膳は食わせん、みたいなの。

中村と由美、入れ替わる。喫茶店。

由美 やめてよもー。

香 ええ、なんで、だってそうだったじゃん。えびマヨちゃんだったじゃん。

由美 あー、もう、はずかしいー。いやあ、もう殺したい。めっちゃ殺したいよね。そのえびマヨちゃん。

香 え、なに、そうなの。栄光の過去じゃないの。

由美 若気の至りだよ。消したい過去ですよー。

香 そうなんだ。

由美 そらそうだよ。いやー、若いときってさ、なんであんなに好きでもない男達に口説かれるのに躍起になっちゃうんだらうね。

香 なんか、あれだね。おとなになったね。

由美 なりたいもんだね。

香 いや、なってるでしょ？

由美 どうかなー。まあ年はとったけどね。

香 まあね。

由美 いや、でもまあ香は大人だよね。

香 え、なになんです。
由美 仕事続いてんでしょ。
香 まあまあ一応ね。
由美 なんだっけ、パッケージングの会社？
香 の、事務。
由美 えらいよね。
香 いやいやいや全然だよ。雑用ばかりだし。誰でも出来る仕事だし。
由美 またまた。
香 ほんとほんと。
由美 もうベテランでしょ。
香 まあね、新人とかはいつてくるとこんなに出来ないんだーとか、思うけど。
由美 使えないんだ。
香 つかえない。つかえない。
由美 でもそうか。新人とか入ってくるんだね。上司なんだ。
香 上司ってカンジじゃないよ、なんか、普通。先輩、みたいな。
由美 へー。
香 で由美は、どうしてんの。
由美 まあ、バイト？
香 あ、そうなんだ。
由美 うん。あー、でももうやめるよ。
香 あ、そうなんだ。
由美 で、就職する。
香 そうなの。
由美 うん。……ていうか、永久就職？？
香 永久就職？
由美 来月結婚するんだ。
香 え、まじで。
由美 うん。
香 おめでどう。
由美 ありがとう。
香 大人じゃん。
由美 まあね、大人になろうかな、みたいな。
香 えーもう、なに。相手は、どんなひと。
由美 お医者さんなだけどね。
香 へー。
由美 あ、でも医者っていつてもなんか、これからだから。受け入れ先決まったばっか

りだから。新人さんだし、稼ぎは全然なんだけど。
香 そっか。いや、でもすごいね。お医者さんって。
由美 香は、まだつづいてるの。
香 え。
由美 中村くんと。
香 あー、ね。
由美 ながいねー。結婚とかするの。
香 いや。
由美 まあ悩むよね。
香 うん。
由美 中村君じゃね。
香 ……別れたよ。
由美 そうなの。
香 うん。
由美 そうなんだ。
香 うん。
由美 今は。彼氏とかいるの。
香 あー、うん。
由美 どんなひと。
香 ……弁護士めざしてるひとなんだけど。
由美 すごいね。
香 いやいや。
由美 どこで知り合ったの。
香 会社の人で。
由美 へー。
香 ……そんで、ほら、私、小説とかかいててさ、
由美 え、まだやってんの。
香 まあまあ、一応ね。
由美 で。
香 で、まあ、読んでもらう機会があつて、面白いじゃん、みたいな。
由美 ファンです、みたいな。
香 そう、かな。
由美 なんか、いいね。
香 いやいや。
由美 まだがんばってたんだ。
香 まあ。

由美　なんかあれ？投稿とかしてんの。

香　いや、それはしてないけど。

由美　持込とか。

香　いや、そういうのもしてないけど。

由美　あ、そうなんだ。

香　うん。

由美　……。

香　あ、でも……サークルに入ってる。小説かいたりするひとの。

由美　へえ。どんなことしてんの。

香　なんか、どんなことっていうと。なんだろう、ねえ？

と、いつのまにかいる山野に。

山野　まあ、勉強会とか、本作ったりとか。

香　……とか。

由美　すごいね。何人ぐらいいるの。

山野　十五人くらい。まあ、幽霊部員みたいなのもいれたらね、二十人くらいになるんだけど。活動はまあ月に二回くらいなんだけど。会費も安いよ。月に二千円で。

本作るときはね、まあ載った人が、出し合う、みたいなかたちになるけど。人目にふれたらね、なんか引つかかるかもしれないわけだし、先行投資だと思えば、そんなにあれかなって感じなんだけど。

ああ、でも嬉しいよ。ほんと。入る気になってくれて。

気づけば由美はいない。そこは居酒屋。

香　まあまだ、わかんないですけど。でもやっぱ、やってるからにはっていうか、ひとり

とりで書きためててもねえ、どうすんだこれ、みたいな。

山野　そうですよね。まあとにかく、じゃあ次は参加ってことで。

香　はい。

山野　それまでに、まあ、できたところまでとかでもいいんで。

香　がんばります。